

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
一	イチ イツ ひと ひとつ								
教1 常①		甲骨 毛公鼎 睡虎地秦簡	大徐・一部	馬王堆 乙瑛碑 十七帖	蘭亭序	高貞碑 九成宮 五経・一部	那須國造碑		
			郭店楚簡	武威漢簡					
七	シチ なな ななつ なの								
教1 常①		甲骨 金文 睡虎地秦簡	大徐・七部	居延漢簡	乙瑛碑 十七帖	集字聖教序 孫秋生造像 孔子廟堂碑	五経・序 稲荷山鉄剣		
			包山楚簡	居延漢簡	曹全碑				七 法華義疏
丁	チョウ テイ								
教3 常①		甲骨 金文 包山楚簡	大徐・丁部	居延漢簡	禮器碑 孫過庭	智永	張猛龍碑 皇甫誕碑	九経・序 聖武天皇集	
			包山楚簡	段注・丁部					
下	カ・グ おろす・おろ す・くださる・ くだす・さがる・ さがる・しも と								
教1 常①		甲骨 包山楚簡	泰山刻石	馬王堆	禮器碑 十七帖	集字聖教序	魏靈藏造像 九成宮	五経・序 法華義疏	
			包山楚簡	大徐・下部	段注・下部	敦煌漢簡			
			袁成叔鼎 睡虎地秦簡	大徐篆文	段注篆文				
三	サン みみつ みつつ								
教1 常①		甲骨 大孟鼎 睡虎地秦簡	大徐・三部	居延漢簡	乙瑛碑 十七帖	集字聖教序	張猛龍碑 九成宮	五経・序 法華義疏	
			包山楚簡	大徐古文	嵩山少室石闕銘				
上	ショウ・ジョウ あがる・あげ る・うえ・う わ・かみ・の ほす・のほせ る・のほる								
教1 常①		甲骨 戦国・金文 大徐・上部	段注・上部	馬王堆	乙瑛碑 十七帖	集字聖教序	始平公造像 九成宮	五経・序 法華義疏	
			包山楚簡	大徐篆文	段注篆文				
			金文 包山楚簡						
			包山楚簡						

【七】「十」と字体衝突した結果、縦線を曲げるようになったのであろう。当用漢字字体表では康熙字典や当用漢字表と同じように最終画を上にはねているが、教育漢字は止めている。大徐本には「陽之正也」、段注本には「易之正也」とある。

【丁】大徐本と段注本で字体が微妙に異なる。
【下】大徐本と段注本の字体が異なる。大徐本に先に出てくる字体と段注本の篆文として後から出てくる字体が同じ。大徐本の篆文と泰山刻石の字体が合致。段注本と甲骨や鉄鼓の字体が合致。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
												一 現代中国
												七 現代中国
												丁 現代中国
												下 現代中国
												三 現代中国
												上 現代中国

【上】大徐本と段注本の字体が異なる。大徐本に先に出てくる字体と段注本の篆文として後から出てくる字体が同じ。段注本と甲骨や金文の字体が合致。

【一】²丈²与³丑⁴不⁴且

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
丈	ショウ たけ		𠄎	丈	丈		丈	丈	丈
丈	③		𠄎	丈				丈	丈
万	マン ばん よろず						万	万	万
萬	マン ばん よろず		𠄎	萬	萬	萬	萬	萬	萬
与	ヨ あたえる あずかる		与	与			与	与	与
與	あたえる あずかる くみする		與	與			與	與	與
丑	チュウ うし		𠄎	丑			丑	丑	丑
不	フブ ず		不	不			不	不	不
且	カツ しばらく まさに		且	且			且	且	且

【丈】「支」と字体衝突し、漢代に字体を変更したのでろう。「丈」の点は「咎なし点」で付けても付けなくても良い。
 【万】「万」と「萬」は別字だが古くから通用し、干祿字書も両方とも「正」とする。「萬」の居延漢簡の草書体が「万」に変化したのかとも思ったが、「万」は居延漢簡の時代よりも前の戦国時代から使われており時代が合わない。もう一つ関連する文字に「卮」がある。この字も「マン」と読む。「マン字」が「マンジ」になったようだ。
 【与】「予」は「與」とは別字だが通用する。「与」は多くの漢和字典では「一」の2画だが、康熙字典では「一」の3画で、

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
丈	丈	丈	丈	丈	丈		丈	丈	丈	丈		丈
	丈				丈							丈
	丈				丈							丈
万	万	万	万	万	万			万	万	万		万
	万				万							万
	万				万							万
与	与	与	与	与	与					与		与
	与				与							与
	与				与							与
丑	丑	丑	丑	丑	丑							丑
	丑				丑							丑
不	不	不	不	不	不							不
	不				不							不
	不				不							不
且	且	且	且	且	且							且
	且				且							且

字体も異なる。最終画の横線が右に突き出るのは江戸以降か。拓本の干祿字書は不鮮明なので江戸期の版本をあげる。
 【且】大徐本にはないが段注本に古文がある。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
丘	キュウ おか								丘 王勃詩序
									丘 五経一部(石経)
									丘 江戸五経(石経)
世	セイ よ								世 聶晉指歸
世	教3 常①								世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									世 聶晉指歸
世									

【1】³中串【、】²丸³主⁴井【ノ】¹乃久

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆家	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
中	チュウ ジュウ なか あた ち うち								
教1 常①		甲骨 何尊 石鼓文	大徐・1部	段注・1部 居延漢簡	淳化閣帖	集字聖教序	張猛龍碑 温彦博碑	五経・序	稲荷山古墳
		甲骨 散氏盤 睡虎地秦簡	大徐古文	段注古文 石門頌					法華義疏
		甲骨 侯馬盟書 郭店楚簡	大徐籀文	馬王堆 禮器碑					
串	カン セン くし なれる つらぬく								
新①									
丸	ガン まる まるい まるめる								
教2 常①			大徐・丸部	居延漢簡	智永千字文	鴨頭丸帖	和泉男生墓誌		東大寺獻物帖
丹	タン								
常①		甲骨 金文 包山楚簡	大徐丹部	馬王堆 禮器碑陰	書譜	晋祠銘	王丹虎墓誌	九成宮	五経・丹部 王勃詩序
		睡虎地秦簡	大徐古文						
		大徐古文							
主	シュ ス おもし								
教3 常①		睡虎地秦簡	大徐・部	居延漢簡	乙瑛碑	淳化閣帖	興福寺斷碑	鄭義下碑	皇甫誕碑
		睡虎地秦簡	大徐古文						法華義疏
		大徐古文							
井	カン トン どんぶり どん								
新②									
乃	ノ ダイ ナイ すなわち の								
人①		甲骨 大孟鼎 郭店楚簡	大徐・乃部	馬王堆	北海相景君碑	十七帖	興福寺斷碑	鄭義下碑	九成宮
									五経・序 王勃詩序
		毛公掇	睡虎地秦簡	大徐古文	居延漢簡	曹全碑			
		侯馬盟書	大徐籀文	居延漢簡					
		侯馬盟書	大徐籀文	居延漢簡					
久	キュウ ク ひさしい								
教5 常①		睡虎地秦簡 泰山刻石	大徐・久部	居延漢簡	北海相景君碑陰	十七帖	集字聖教序	高貞碑	孔子廟堂碑
									九経・雜辨部 聖武天皇雜集

【中】大徐本と段注本の字体が異なるが古文は同じ。段注本には籀文が載っていない。大徐本の籀文の字体が康熙字典の古文に合致する。段注は□の形を使い分けているようだ。
【串】殷代の金文や楚簡に「串」の字体の例があるが、字種が異なる可能性があるので掲載しなかった。

【丸】点の位置に注意。『康熙字典』では「凡」に似た字を正字とし、通用字体を俗字としている。漱石は江戸版本と同じ字体を書いている。直井潔「国定教科書に於ける正字俗字一覧表」では「文部省に於いて特に正体を捨てて俗體を取りれたるもの」としている。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
												中 現代中国
		古文										
												串 現代中国
元暦萬葉⑥	節用	1 6										
												丸 現代中国
元暦萬葉⑫	節用	ゝ 2			教科書							康熙(俗字)
												丹 参考
元暦萬葉①	節用	ゝ 3							○			現代中国
		古文										
		古文										
												主 参考
屏風土台		ゝ 4							○			現代中国
	節用											
												乃 現代中国
元暦萬葉①	節用	ノ 1										
		古文										
		古文										
												久 現代中国
元暦萬葉⑫	節用	ノ 2										

【丹】太宰は「丹」よりも「丹」に近い。大徐篆文に従えば点は横線になるはず。
【井】「どんぶり」という意味で使うのは日本独自。中国では「井」と「井」は異体字でどちらも「井戸」のこと。「どんぶり」とは物が水に落ちる音という説もあり。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆書	隷書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
九	ク キュウ このここのつ								聖武天皇雜集
乞	キツ コイ こう								聖武天皇雜集
也	ヤ ナリヤ								王勃詩序
乱	ラン みだす みだれる おさめる みだれ								王勃詩序
亂	ラン おさめる みだす みだれる わたる								光明皇后集
乳	ニウ ウ ちち								王勃詩序
乾	カン かわかす かわくい								王勃詩序
了	リョウ おえる おわる ざとる								蜀玉集
予	ヨ あずかる あづける あたえる あらかじめ われ								伝空海急就草

【乞】「气」と同字とする字書と別字とする字書があるが、本書では別字とした。

【也】大徐に2種があり、片方は「秦刻石」となっている。

【亂(乱)】「乱」は干祿字書と康熙字典に「亂」の俗字として掲載。日本では上代以降「亂」と「乱」の両方が使われるが、

江戸時代になると「乱」が多く使われ、繁体の「亂」の使用例がみつからない。文部省活字は「亂」。太宰治も「乱」を書き、「亂」は書いていない。

【乾】現代中国では、qian と読むときは「乾」を使い、gan と読むときは「干」を使う。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
九												九 現代中国
乞												乞 干祿(俗) 現代中国
也												也 現代中国
乱												乱 江戸干祿(俗) 現代中国
亂												亂 干祿(俗) 現代中国
乳												乳 現代中国
乾												乾 干祿(俗) 現代中国
了												了 現代中国
予												予 現代中国

【予】別字だが「豫」と通じる。太宰治は「豫感」と書いている。現代中国では「予」と「豫」を統合していない。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
豫	ヨ あらかじめ		𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	豫 聖武天皇集
争	ソウ あらしう いかでか	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	争 蜀玉集
争	ソウ あらしう いかでか		𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	争 豊替指歸
事	シズ こと つかえる	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	事 王勃詩序
事		𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	
二	ニ ふたつ	二	二	二	二	二	二	二	二 王勃詩序
井	ショウ セイ い	井	井	井	井	井	井	井	井 王勃詩序
井		井							
云	ウン いう		云	云	云	云	云	云	云 王勃詩序
雲	ウン くも	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	雲 王勃詩序
雲		𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	
雲		𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	

【豫】大徐本と段注本の古文の字体が異なる。段注本の古文と康熙字典の古文の字体が合致する。

【争】大徐本と段注本の字体が異なる。「争」が正(統)字体とされているが、行書や楷書では「争」「争」両方が書かれている。横線が右に出るものと出ないものがある。漱石も太宰も

横線を右に出していない。上部の「爪」を「日」に誤る字がある。睡虎地秦簡の上部も「日」のように見えるが、傾いているから「爪」なのだろう。

【事】大徐本と段注本の古文の字体が異なる。「事」と「事」の差は「口」が点々に略されるだけで大きな問題ではない。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
豫	豫	豫	豫	豫	豫	豫	豫	豫	豫			豫 現代中国
		𠄎										
争	争	争	争	争	争	争	争	争	争	争	争	争 干祿(通) 現代中国
争			争									
事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事 現代中国
		𠄎										
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二 現代中国
井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井 敬史君碑 現代中国
云	云	云	云	云	云	云	云	云	云	云	云	云 節用の「言」 現代中国
雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	
雲												
雲												

下から2本目の横線が漢代までは右に出ているが、南北朝以降は出なくなる。九経字様、康熙字典など正字では出る。弘道軒も漱石も太宰も出していない。漱石はほとんど草書を書くが、まれに楷書・行書の字体を書く。

【井】点が付く字体がある。「刑」の初文が「井」なので字体の

衝突を避けるために「井戸」の「井」の方に点をつけて「井」にしたともいう。

【云】ももとは「雲」の古文だが「いう」の意味に使われるようになったため、後に「雨」を加えて「雲」ができたという。「言」の省略体の「云」と字体が衝突する。